『希望学』ことはじめ

地域再発見が第一歩

宇野　重規

「希望学　希望の社会科学」という研究プロジェクトが、東京大学の社会科学研究所ではじまったのは、二〇〇五年のことである。「なんだか、変なプロジェクトだなあ」という感想が数多く寄せられた。無理もない。われわれはじめた本人たちにとっても、希望という何ともとらえがたいものを社会科学の対象にすることができるのか、まったく自信がなかった。

社会科学とは、社会のさまざまな現象を、なるべく客観的にとらえようとする学問の総称である。政治学、経済学、社会学など、いろいろなアプローチはあるが、ある社会現象がどのように生じたか、背後にあるものは何か、それにどのような意味があるのかを、自分の頭で納得するまで考えるという点では同じである。

このプロジェクトでは、古今東西の希望をめぐる考察を検討する一方で（そのためには哲学や宗教の領域にまで立ち入った）、なるべく多くの人の話を聞くことを研究方針とした。郵送やインターネットによる全国調査のほか、岩手県の釜石市でフィールドワークを行ったのは、そのためである。

いま、日本の地域社会には元気がないとよく言われる。若者は都会に行ったまま、帰らない。住民の高齢化は進むばかり。商店街はシャッターがしまり活気がない。日本のいたるところで、同じような話を聞く。

釜石の場合、かつては製鉄の町として、そしてラグビー日本選手権七連覇の偉業で知られるだけに、高炉の火が消えた現在の状況はなおさら厳しい。そんな町にいって、「あなたにとって、希望とは何ですか」とは、正直なところ聞きにくい。

とはいえ、「釜石の町に行って、釜石の人たちと一緒に希望の問題を考えてみたらいい」、そんなアドバイスをしてくれる人がいた。釜石の町の方からも、「本気で調査をするなら、つきあってもいい」という声をかけてもらった。そのような経緯で、希望学釜石調査は始まった。

予想通り、多くの住民の方には「希望といわれても…」というとまどいが見られた。それでも、何度か釜石にかよい、相互の信頼関係が築かれていくとともに、ぽつりぽつりといろいろな話をしてくれる人が増えていった。

そんな聞き取りのなかからわかってきたことは多い。なかでも、希望をもち、自分のため、家族のため、町のため、いろいろな取り組みを試みている人がたくさんいるということは、うれしい発見だった。

釜石の鍾乳洞や鉱山からわき出る天然水を使ったミネラルウオーターの製造・販売や、ワカメなど水産物から生成した機能性食品の開発と商品化、あるいは環境や暮らしと密着したグリーン・ツーリズム（農漁村体験）など、すでに一定の成功をおさめた試みも多い。と同時に、そのような一人ひとりの希望が、互いに結びつき、地域の希望にまで発展するには、まだまだ課題が多いということもわかってきた。

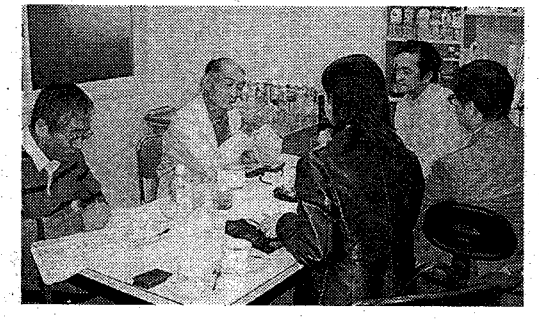
希望は、私たちを未来に向かって行動させる原動力である。しかしながら、未来への想像力をもつためには、自分たちの過去をきちんと振り返る必要がある。地域の伝統を再発見することが、地域の希望に向けての第一歩であるということも、釜石の人々から教えてもらったことの一つである。

希望学プロジェクトは、釜石調査を一つの核に、そして理論的考察や国際的比較をもう一つの核として、とりあえずの成果をまとめることができた。この四月から、東京大学出版会より『希望学』全四巻として刊行されているものが、それである。

もちろん、希望についてすべてわかったとはいえない。ただ、釜石市民からはじまって世界各地の研究者たちに至るまで、多くの人々の対話の結果がそこにまとめられている。私たちはこれを元に、さらに希望について考えていきたいと思っている。

◇

うの・しげき＝政治学者・東京大社会科学研究所准教授。1967年、東京生まれ。東京大大学院博士課程修了。著書に『トクヴィル』＝サントリー学芸賞受賞＝など。



釜石市民に聞き取り調査をする東京大社会科学研究所のスタッフたち（手前）＝同研究所提供